

俺はもう我慢の限界だった。

娘の莉佳子^{りかこ}が可愛くて仕方がないのだ。今年で十九歳になる。体はすっかり大人の体になっていた。何よりも莉佳子は色白でスタイルがいい。そして脚もスリムだ。顔は別れた妻に似ていて可愛い。

俺は現在独身で、妻とは五年前に離婚していた。元妻とは性格の不一致で離婚した。価値観が違っていただ。俺もそう思っていたので、離婚には即同意したのだ。

そのとき莉佳子はまだ十四歳で中学二年生だった。

離婚するとき、莉佳子は母の方についていくのだろうかと、俺は諦めていた。しかしだ、彼女はなんと俺の方についてきてくれたのだ！

このときほど嬉しかったことはなかった。人生であれ以上嬉しいことは今後ないと思う。宝くじが当たるよりも嬉しいことだった。それぐらい俺には人生の転換期というか、分岐点というか、とにかくターニングポイントだったことには間違いはない。

莉佳子に「なぜお父さんの方についてきたんだ？」と訊いたら、「お父さんなら口うるさいこと言わないと思ったから」と答えた。

なんだか微妙な答えだが、それでもいい。娘にそう言われたら、俺は余計に口うるさいことが言えなくなってしまった。

確かに俺は莉佳子に対しては放任主義で、叱ったり、注意したりはしなかった。それはただただ娘が可愛かったから、つい甘やかしていたというのもある。妻は嫌われ役に徹して、莉佳子を教育していた。

「しっかり勉強しなさい」

「こんなことが出来なくてどうするの！」

「そんなことではいい大学へ進学できないわよ」

等々。

娘には何かと厳しかった。その矛先が俺の方にも来ていたのだからたまらない。

「あなたからも言ってよ、あの子ったら勉強もしないで遊んでばかりいて、こんなことじゃ、まともな会社に就職できやしない」

「そんなに口うるさく言わなくたっていいだろ。まだまだ遊びたい盛りなんだから」

「なに呑気なこと言ってるの。すぐに大人になっちゃうんだから、そのとき就職できずに泣くのはあの子なのよ。私は莉佳子のために言ってるんだから」

そう言われると俺は何も言えなくなった。妻の言うことの方が正論だからだ。

「いい会社に入って、いい人と巡り会って結婚するのが、あの子の幸せなのよ」

莉佳子もいつも母親から叱咤激励されて、相当ストレスが溜まっていたことだろう。

俺と妻との価値観はまったく違っていただ。離婚理由は他にもあるだろうが、そんなことで俺たちは離婚してしまったのだ。

俺には料理もできず、家事もあまりやってこなかったのだから、娘を育てていく自信はなかつ

た。ましてや女の子なんて、どう教育したらいいか判らない。幾多の困難が待ち受けていることだろうと思ったが、離婚のとき莉佳子は俺と暮らしたいと言ってくれたのだ。

そのとき俺は思った。なんとしてもこの子を立派な女性に育ててみせると。なににも勉強だけがすべてではない。今ではお金を稼ぐ方法がいくらでもある。莉佳子が自分で自分の道を選んで、俺はそれを後押しするだけだと心に決めていた。

莉佳子のやりたいことなら、なんでも応援してやろうと思ったのだ。彼女に夢があるなら、たとえ借金してでも、その夢を叶えてやろうと決意したのだ。

そして離婚が成立して、妻が家を出て行くと、莉佳子は積極的に家事をやってくれた。彼女はこの家の主婦業を買って出てくれたのだ。俺には仕事があったので、娘には本当に助けられた。

莉佳子は何よりも料理が好きで、朝ごはんや夕飯の支度までしてくれたのだ。これがまたすごく美味しいのだ。彼女には料理人の才能があるんじゃないかと思うほどだった。

「私はね料理が好きなの。一家に主婦は二人要らないでしょ」

彼女はいつだったかそう言っていた。

なるほど、莉佳子は料理がしたかったのかと納得した。妻が家を出て行ったことは莉佳子には好都合だったらしい。もちろんそれだけではなく、常日頃から母親が鬱陶しかったと、離婚してから俺に洩らしていた。

「お父さん、私、大学なんか行かなくていいよね？」

と彼女は言った。

「もちろんだよ。お前の好きなように生きていけばいいよ。お父さんは何でも応援するから」

「じゃあ私、ユーチューバーになっていい？ 料理のチャンネルを作りたいんだ」

「おお、いいじゃないか。お前にぴったりだよ。やれやれ！」

俺は二つ返事でOKした。

それが高校三年生のときだった。高校卒業してから彼女は少しだけフリーターをしていたが、三か月ほどで辞めてしまい、家でひたすら動画撮影を始めたのだ。

どうも外での仕事は彼女には向いていないようだった。

莉佳子は自分で簡単レシピを考案して、それを動画配信していた。それが評判で、次から次へと登録者数が増え、あっという間に千人を超えた。今では十万人を超えて、ちょっとしたユーチューバーだ。その収益が入ってきている。

それもそのはずだ。莉佳子は顔もスタイルもいいので、男性ファンも多かった。そんな事情からあまり外には出ないようにしていた。

元タインドア派の彼女だが、顔が売れてしまうと余計に外には出られなくなったのだ。いつだったか、ちょっとコンビニへ買い物に行ったときに、若い男にナンパされて、ひどい目に遭ったと俺に言ってきた。それ以来、莉佳子は無駄に外に出ないようになり、何か用事があるときは、なるべく俺と一緒にいくようになったのだ。